

# 源氏物語における〈緊張の持続〉の表現

——「精進」「修法」「祈り」「行ひ」をめぐって——

土居 裕美子

## 一 はじめに—問題の所在—

〈緊張の持続〉はどのように描かれるのか。これを明らかにする一階梯として、まず〈精神的な緊張の緩和〉を表す「たゆむ」を手掛かりとしたい。平安時代和文において、〈緊張の緩和〉を表す語「たゆむ」の前提となる「(精神的な)緊張」は、本来、時間的に持続・継続することが期待されるものである。例えば、枕草子にあるように

たゆまるるもの 精進の日の行ひ。日遠きいそぎ。寺に久しく籠たる(注1)。(枕草子 たゆまるるもの)

「精進の日の勤行」、「当日まで日数がある行事の準備」、「寺に長く参籠する時」、の三点は、いずれも緊張を持続すべき重要な行事であるが、特に後者の二例は、「遠き」「久しく」とあるように、長い期間からくる緊張の跡切れが「たゆまるる」と表現されている。では、枕草子において〈緊張を持続すべき行事〉の代表とされる、「精進」は、平安時代における物語の中で、どのように描かれているか。

源氏物語に「精進」の語は三例見られる。「精進」する主体は、源

氏二例、薰一例である(注2)。

①院へまゐり給へれば、いといたう面瘦せにけり、精進にて日を経るけにや、と心ぐるしげにおぼしめして、御前にて物などまゐらせ給て、とやかくやおのしあつかひきこえさせ給へるさま、あはれにかたじけなし。(葵 一327②)

②あはれにうち眺めつゝ、御精進にて、御簾おろしこめておこなはさせ給ふ。(濔標 一121⑪)

③なを、この御けはひありさまを聞き給たびごとに、なごてむかしの人の御心おきてをもてたがへて思ひ隈なかりけんと、悔ゆる心のみまさりて、心にかゝりたるもむつかしく、なぞや、人やりならぬ心ならんと思返給ふ。そのまゝに、また精進にて、いとゞたゞおこなひをのみし給ひつゝ、明かし暮らし給。(宿木 五47⑦)

用例①の「精進」を行う主体は源氏である。葵上の死後、桐壺院のもとを訪ねた源氏の憔悴した様子に驚き、院は源氏が葵上の喪に服して精進潔斎を行った日数の長さを慮る。用例②の「精進」も、源氏が主体として主催するものである。六条御息所の死後、源氏は

御息所をしのび、周囲の簾をすべて下して僧に勤行をさせる。用例③は、薫の「精進」の様子である。大君の意志に背いて中君を匂宮に譲ったことを後悔する薫は、大君の死後、一心に精進の日々を送っている。これら三例の源氏物語における「精進」の表現では、いずれも「精進にて」の形式で、それぞれ「日を経」「御簾おろしこめておこなはず」「いとどたゞおこなひをのみす」とあるように、(1)日数をかけ、(2)他からの接触を遮断した状態で、(3)そのことのみを集中して行われる、の三点が前提としてあったことが示される。これらの前提が〈精神的な緊張〉として保たれるべきこれらの前提が崩れた状態を、平安時代和文では「たゆむ」で表現されていることを述べた。

実際の用例の中では、勤行や安産祈願・病氣平癒の祈祷が、先に指摘した前提のすべてを保っている例として、「たゆむ」に打消しを伴った「たゆまず」や、形容詞「たゆみなし」を用いて表現される。

○わが身をなきになしても東宮の御世を平かにおはしまさば、  
とのみおぼしつゝ、御おこなひたゆみなく勤めさせ給ふ。人  
知れず、あやうくゆゝしう思ひきこえさせ給事しあれば、我  
にその罪を軽めてゆるし給へ、と仏を念じきこえ給に

(賢木)

○「月ごろ悩ませ給へる御心ちに、  
ませ給はずせさせ給ふ積りの、いとどいたうくづをれさせ給  
に

(薄雲)

○かうてもたいらかにだにおはしまさば、と念じつゝ、  
又延べてたゆみなくをこなはせなど、よろづにせさせ給

(御修法)

(柏木)

○年あらたまりては、何ごとかおはしますらん。御祈りはたゆみなくつかうまつり侍り。今は一ところの御ことをなむ、やすからず念じきこえさする。など聞こえて (早蕨)

源氏物語以外(注3)でも、仏道修行や加持祈祷について、次のように用いられる。

○七月の内には、おほやけの事いとあわただしく暇なき中にも、  
此(の)御八講の事たゆみ給はず。八月二十一日にとなん定  
めける。 (落窪物語 卷之三)

○内大臣殿、世の中危うくおぼさるゝまゝに、二位を「たゆむ  
なく」と責め宣へば、二位えもいはぬ法どもを、我もし、  
又人しても行はせて (栄花物語 卷第四)

「精神的な緊張」は、本来時間的に持続・継続することが期待されるものであり、それが緩和される「たゆむ」は、そのことによつてマイナスの状況を生み出す、望ましくない状態である。「たゆまるもの」と自発の「る」を伴うことから、緊張を持続しない限りは自然に気が緩んでくることを示唆している。

本稿では、「修法」「祈り」「行ひ」の語に注目し、それらの行事が、どのような形で行われていたか、その表現を具体的に見ていくことにしたい。

## 二 「修法」「祈り」について

源氏物語において「修法(ずほう)」「御修法(みずほう)」の語は、合計三十六例認められ、登場人物の病や出産、死に際して、僧らに

よって行われる加持祈祷として描かれる(注4)。また、「修法」の類例として僧らによる加持祈祷は「祈り(いのり)」「御祈り」の語によって表されるが、それらは「御祈りども」を含めて三十六例見られる。これらの中には、登場人物の個別な思いを込めた「祈り」も含まれるが(注5)、主には「修法」と同様に、僧たちによって行われる加持祈祷を表す。ここでは、以上の「修法」「祈り」の行われ方の表現を類型化して示していく。

### 【はじめ(始)】 行事の開始

「修法」と結びつく動詞としては、「す(せさせ給)」「行ふ(おこなはせ給)」「らと並んで「はじめ(始)」が三十六例中九例と、特徴的に認められる。

①多くの人の心を尽くしつる日ごろのなごりすこしうちやすみて、今はさりともおぼす。御すほうなどは、又く始め添へさせ給へど、まづはけうあり、めづらしき御かしづきに、皆人ゆるへり。(葵 一 308④)

②例の、阿闍梨、大方世にしるしありと聞こゆる人のかぎり、あまた請じ給。みすほう、読経、明くる日より始めさせ給はむとて、殿人あまたまありつどひ、上下の人たちさわぎたれば、心ほそさの名残なく頼もしげなり。(総角 四 451⑤)

用例①は、葵上出産の場面である。多くの人々が看護に心を砕いた何日間かのち、皇子が誕生し、修法はまた始めるけれど、人々の少し緊張がゆるんでいる場面である。また、用例②は、大君の病に際して、退出していた宇治山の阿闍梨を再び招き、効験があると世評の高い僧たちばかりによる病氣平癒の祈祷や仏典読誦を開始す

る。このような傾向は「祈り」も同様である。

③いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともあくもな覽を御覽じはてんとおぼしめすに、「けふ始むべき祈りども」さるべき人々うけたまはれる、こよひより」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふつ。(桐壺 一 8⑨)

用例③は、桐壺更衣死去近くの場面である。宮中の禁忌を破って更衣の死を見届けようかと思ひ詰める帝に対して、母君病氣平癒の祈祷が始まろうとする。

以上のように、源氏物語における「修法」は、動詞「はじめ(始)」と結びつく例により、加持祈祷の行事の「開始」に焦点が当てられていることが分かる。

### 【のぶ(延)】 行事の延長

次に注目される動詞には「のぶ(延)」がある。開始した「修法」「祈り」の「験」が効果的に現れない場合や、まだ不安が残る場合に、その加持祈祷は延長される。

④かうてもたいらかにだにおはしまさば、と念じつゝ、みすほう又延べてたゆみなくをこなはせなど、よろづにせさせ給。(柏木 四 20④)

⑤名残も恐ろしとて、御すほう延べさせ給へば、とみにもえ帰り入らでさぶらひ給に(手習 五 369⑮)

⑥面のいたう赤みたるを、なほなやましうおぼさるゝにや、と見たまて、「など御けしきの例ならぬ。ものゝけなどのむつかしきを、修ほう延べさすべかりけり」との給ふに

(賢木 一 388①)

⑦「さはありとも、**修法**は又延べてこそはよからぬ。験あらむ僧もがな。なにがし僧都をぞ、夜居にさぶらはすべかりける」など (宿木 五 52⑩)

用例④は、死に瀕した柏木のための修法の延長とその熱心さを表す。また、用例⑤は病後も油断できない(名残も恐ろし)との明石の中宮の判断・意図によって祈祷が延長される。用例⑥は、源氏と朧月夜の密会が発覚する場面で、朧月夜の顔色が上気しているのを、右大臣が病かと勘違いして平癒祈願を延期すべきかと述べる。用例⑦は六の君のところから戻った匂宮が、中君の機嫌をとる場面であるが、ここでも「験ある僧」を集めてしっかりと祈祷を行うため期間を延長しようかと述べている。

以上のように、動詞「のぶ(延)」と結びつく例から、源氏物語に描かれる「修法」「祈り」は、必要に応じて延長が望まれるものであり、長く行われる加持祈祷であることが分かる。

### 【数をつくして・様々 等】 行事の多さ

次に、「修法」「祈り」の様子を描写する表現の特徴的なものを見る。まず、数の多さが挙げられる。

⑧まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみ給へるに、にはかに御けしきありてなやまみ給へば、いとゞしき**御祈り**数を尽くしてせさせ給へれど、例のしうねき御ものゝけひとつ、さらに動かず。やむごとなき験者ども、めづらか也ともてなやむ。 (葵 一 305⑩)

⑨年かへりぬ。桐壺の御方、近づきたまひぬるにより、正月朔

日より**御すほう**不斷にせさせ給ふ。寺ぐく社ぐくの**御祈り**、はた数も知らず。 (若菜上 二 269①)

⑩をろかにおぼされぬことと見給へば、殿人、親しき家司などは、おのくよるづの**御祈り**をせさせ、なげききこゆ。 (総角 四 456⑦)

用例⑧の「御祈り」は、「数を尽くして」とあるように、葵上の出産場面、急に産気づく葵上が、物の怪に取りつかれた際の祈りの多さである。同様に、用例⑨明石女御の産期が近づく場面の「数も知らず」、用例⑩の、豊明の節会の夜に、薫と、死に近い大君が語り合う場面での「よるづの御祈り」のように、その数の多さが特徴的に示される。次の用例⑪⑫の「さまざまに」も同様に、祈祷の数や種類の多さから、できうる限りの懸命な加持祈祷の様子が描かれている。

⑪いと苦しげにし給へば、**すほう**の阿闍梨ども召しいれさせ、さまざまに験あるかぎりして、**加持**まみらせさせ給ふ。われも仏を念ぜさせ給ふこと限りなし。 (総角 四 459①)

⑫宮は、いとらうたげにて、なやみわたり給さまのなほいと心ぐるしく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、うきに紛れぬ恋しさの苦しくおぼさるれば、渡り給て見たてまつり給につけても、胸いたくいとほしくおぼさる。**御祈り**などさまざまにせさせ給。 (若菜下 二 389④)

### 【さわぐ(騒)・のしる(喧)】 喧騒・盛大さ

「修法」「祈り」の様子を描写する表現の特徴的なものには、先にあげた数の多さだけでなく、その喧騒ぶり、盛大さを表すものが

見られる。代表的な動詞は「さわぐ(騒)」「のしる(喧)」である。

⑬まことに、臥し給ぬるまゝに、いといたく苦しがり給て、二三日になりぬるにむげによわるやうにし給。内にも聞こしめし嘆くこと限りなし。御祈り方かくにひまなくのしる。祭、祓、すほうなど言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなくゆゝしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにや、と天の下の人のさわぎなり。(夕顔 一 135⑬)

⑭すほうなどしさわげど、御ものゝけこちたく起こりてのしるを聞き給へば、あるまじき疵もつき、はぢがましき事かならずありなん、とおそろしうて、寄り付き給はず。(真木柱 三 124⑭)

⑮例の、阿闍梨、大方世にしるしありと聞こゆる人のかぎり、あまた請じ給。みすほう、読経、明くる日より始めさせ給はむとて、殿人あまたまありつどひ、上下の人たちさわぎたれば、心ぼそさの名残なく頼もしげなり。(総角 四 45⑮)

⑯若宮を見たてまつり給にも、何に忍ぶのと、いとゞ露けゝけれど、かゝる形見さへなからましかば、とおぼし慰む。宮は沈み入りて、そのまゝに起き上がり給はず、あやうげに見え給を、又おぼしさわぎて、御祈りなどせさせ給。(葵 一 314⑯)

用例⑬は、夕顔の死後帰宅し、病臥した源氏のために、父帝が平癒祈禱を各所の寺院・神社で行う規模の大きさを表している。用例⑭は、鬚黒邸での、北の方の物の怪退散の修法の様、用例⑮は、先の【はじむ(始)】の項で取り上げた用例で、大君の病氣平癒の祈禱の開始を告げるとともに、その盛大さが描かれる。用例⑯は葵上の

死去、もしもこんな形見がいなかったら、と思う気持ちを慰みにしながら、母大宮の病臥に対して、平癒祈禱をさせる。

これらのように、動詞「さわぐ(騒)」「のしる(喧)」と結びつく例が多いことから、源氏物語に描かれる「修法」「祈り」は多くの人々を巻き込み、盛大に行われるものであることが分かる。

### 【不断に】 継続性・持続性

「修法」「祈り」に見られる集中した継続性・緊張の持続は、先に示した「たゆまず」「たゆみなし」の語とともに、漢語「不断」でも表現される。

⑰御心のうちは、あなくちをしや、又思ひまする方なくて見奉らましかば、めづらしくうれしからまし、とおぼせど、人にはけしき漏らさじとおぼせば、験者など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どもの中に験あるかぎりみなまありて、加持まありさわぐ。(柏木 四 11⑰)

⑱年かへりぬ。桐壺の御方、近づきたまひぬるにより、正月朔日より御すほう不断にせさせ給ふ。寺々社々の御祈り、はた数も知らず。(若菜上 三 268⑱)

用例⑰は女三宮、用例⑱は明石女御の産期が近づいた際の「修法」の場面(再掲)である。特に用例⑰は、女三宮が若宮を出産、源氏は実子ではないという疑いをさしはさむことのできない現状を口惜しく思いつつ、安産祈願の修法を営む、という場面である。

漢語「不断に」を用いて、その「修法」「祈り」の継続性、緊張の持続を表現している。

【とりわきて 等】 思いの強さ・真剣さ

右以外の表現としては、次に示すように例えば「とりわきて」「ねんごろに」「ゆたけし」などの語を用いて、加持祈祷の真剣さ、思いの込め方が表現される。

○この人亡せたまはば、院もかならず世を背く御本意遂げたまひてむと、大将の君なども、心を尽くして見たてまつりあつかひ給て、御すほうなどは、大方のをばさる物にて、とりわきて仕うまつらせ給。  
(若菜下 二 355⑭)

紫上病臥、平癒の祈祷を熱心におこなう。看病に専念する源氏に代わって夕霧が修法を扱い、夕霧自身が効き目があると考え付いた修法をさらにそれとは別に行わせたことを示す。

○今年は三十七にぞなり給。見たてまつり給し年月のことなども、あはれにおぼし出でたるついでに、「さるべき御祈りなぞ、常よりもとりわきて、ことしは慎みたまへ。ものさはがしくのみありて、思ひいたらぬ事もあらむを、猶おぼしめぐらして、大きなることどもし給はば、おのづからせさせてむ。」  
(若菜下 349⑯)

三十七歳の厄年を迎える紫上に対して(注7)、特に厄災を避けるように留意するよう告げる。

○よろづに思ひ嘆き給て、御祈りなぞとりわきてせさせ給けれど、やむ葉ならねば、かひなきわざになんありける。女宮にもつひにえ対面しきこえ給はで、あわの消え入やうにて亡せ給ぬ。  
(柏木 四 26⑰)

女三宮に会えぬままに柏木死去する場面である(注8)。

その他にも、次に示すように、「ねんごろに」「ゆたけし」「心を

つくして」など、その「修法」「祈り」にかける真剣さ、思いの強さが表現される。

○「不意にて見たてまつりそめてしも、さるべき昔の契りありけるにこそと思給へて、御祈りなどもねんごろに仕うまつりしを、ほふしはその事となくて御文聞こえうけ給はらむも便なれば  
(手習 五 353⑱)

○神無月に、対の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて、薬師仏供養じたてまつり給。(中略)最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。上達部いと多くまゐり給へり。  
(若菜上 二 261⑲)

○「大日如来そらごとし給はずは、などでかかくなにがしが心をいたして仕ふまつる御修法、験なきやうはあらむ。悪霊は執念きやうなれど、業障にまとはれたるはかなものなり」と、声はかれていかり給。  
(夕霧 四 104⑳)

以上、源氏物語における「修法」「祈り」の行われ方の表現を取り上げ、特徴的なものを類型化して示すと次のようにまとめられる。まず、源氏物語における「修法」「祈り」は、その開始に焦点があたり、源氏物語に多い【はじめ(始)】。また、必要に応じて効験が現れるまで延長が望まれて、長期間行われる場合があり【のぶ(延)】、祈祷の数や種類が多く【数をつくして・様々】、継続性、緊張の持続が必要とされる【不断に】。またそれらは多くの人々を巻き込み、盛大に行われるものであって【さわぐ(騒)・のしる(喧)】、その真剣さ、思いの込め方の強さが様々に表現されていた【とりわきて 等】。

### 三 「おこなひ(行)」について

次に、仏道修行・勤行である「おこなひ(行)」の表現を見る。源氏物語において「おこなひ(行)」「御おこなひ(行)」の語は、合計六十五例認められ、先に見た「修法」「祈り」とは異なり、主要な登場人物の仏道心の表れとして描かれる。ここでは、以上の「おこなひ(行)」「御おこなひ(行)」の描かれ方を、兵家の類型として示していく。

用例六十五例のうち、最も特徴的に現れるのが、次に示す「限定」的な表現である。表現別に限定1〜3として示す。

#### 【のみ】 限定1

① かつさぶらふ人にもうちとけ給はず、いたう御心づかひし給つゝ、やうく御おこなひをのみしたまふ。

(朝顔 二266⑤)

② 人の心を起こさせむとて、仏のし給方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思つゞけつゝ、おこなひをのみし給。

(蜻蛉 五275⑤)

③ 松風しげく、風の音もいと心ぼそきに、つれづくにおこなひをのみしつゝ、いつとなくしめやかなり。

(手習 五340③)

用例①の「行い」の主体は朝顔姫君である。源氏の懸想に動じることなく勤行に専念する。用例②の「行い」の主体は薫である。仏の御心を推察しながら、浮舟の冥福を祈る勤行に専念する。用例③

の主体は、浮舟の妹尼である。山里に住み、ひっそりとした秋を所在なく、ひたすらに勤行に精を出す暮らしぶりが描かれる。用例①〜③ともに「のみ」が用いられ、登場人物がそれぞれの立場にたち思いを抱いて仏道修行に専念することが示される。

#### 【ただ】 限定2

先に述べたように、「のみ」で示される「行い」への専念は、助詞「ただ」も同様である。

④ 母宮は、いまはただ御おこなひを静かにし給て、月の御念仏、年に二たびの御八講、をりくのたうとき御いとなみばかりをし給て、つれづくにおはしませば (匂宮 四216⑤)

⑤ 「今は、ただ御おこなひをし給へ。老いたる、若き、定めなき世なり。はかなき物におぼしとりたるも、ことわりなる御身をや」との給にも (手習 五372⑫)

用例④の「御おこなひ」を行う主体は女三宮である。出家後の様子は、「いまはただ」「静かにし給」とあり、さらに「たうとき御いとなみばかりをし給て」ともあるように、俗事を離れ、完全に仏道に専心していることを示している。用例⑤は、尼僧になった浮舟を励ます僧都の言であるが、ここでも「今は、ただ」と仏道に専心することを勧めている。

#### 【他の事なし】 限定3

また、仏道に専心することを表す例としては、上記に加えて「より他の事なし」も二例見られる。

⑥ かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契あるにや、

とおぼしながら、猶かう身を沈めたる程は、**おこなひ**よりほかの事は思はじ、宮この人も、たゞなるよりは言ひしに違ふとおぼさむも心はづかしうおぼさるれば、けしきだち給ことなし。  
(明石 二 63⑭)

⑦「都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、**おこなひ**よりほかの事なくて月日を経るに、心もみなくづほれにけり。」  
(明石 二 63⑧)

どちらも明石巻の例であり、「行ひ」の主体は源氏である。明石にあつて、仏道よりほかのことは思うまいと決心する、あるいは、都の紫上のことを思うにつけても、仏道に専心した日々を送っているが、明石君との宿縁を感じる源氏の心境が描かれている。

### 【まぎれ(紛)なし】

以上のように、「おこなひ(行)」の表現は「限定」の語が用いられて、登場人物が一心に仏道に専念することを示す。このことはさらに、「まぎれ(紛)なし」という語にも表れている。

⑧そのほかの心もとなくさびしき事、はたなければ、**行ひ**の方の人は、その紛れなくつとめ、仮名のよろづの草子の学文、心に入れ給はむ人は、また願ひに従ひ、物まめやかにはかぐしきおきてにも、たゞ心の願ひに従ひたる住まひなり。  
(初音 二 385⑬)

用例⑧は二条東院の女君たちの様子を述べた個所で、「行ひの方の人」とは、空蟬を指す。空蟬が「紛れなく」仏道に専心したことを述べている。

⑨よそながらのむつびかはしつべき人は、齋院とこの君とこそ

は残りありつるを、かくみな背きはてて、齋院、はたいみじう勤めて、**紛れなくおこなひ**にしみ給にたなり。  
(若菜下 392⑥)

用例⑩は朝顔姫君を述べた個所である。源氏にとつて、親しい付き合いの女性として朝顔の前齋院と朧月夜が残っていたところ、朝顔姫君の出家が示唆されている。

⑩いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかゝづらはむ命のほどは**おこなひ**を紛れなく、とたゆみなくおぼしの給へど、さらにゆるしきこえ給はず。  
(御法 四 162⑩)

用例⑩は、紫上の出家、仏道修行にかける思いが述べられた個所である。「たゆみなし」とともに「紛れなく」専心したいという思いが述べられている。

### 【ひたみちに 等】 思いの強さ・真剣さ

右の、仏道修行(行ひ)に専心したいという限定的な思いを表す表現に加えて、先に見た「修法」「祈り」と同様に、仏道に向けての思いの強さ・真剣さが、「ひたみちに」「まめに」などの表現で表される。

○「方々にあつかひきこえ給ふほどに、**おこなひ**も心あわたゞしくこそおぼされぬ。いますこしいづ方も心のどかに見たてまつりなし給て、もどかしき所なく、**ひたみちに勤め給へ**」と君たちの申給へば  
(竹河 四 284⑭)

出家を望む玉鬘に対して、子息たちが、しばらく待って専心できる状況になってから勤めるように、と勧める。「ひたみち」であることが理想であることが示される。



念じる。しゅほう。すほ。」との説明がある。

5 個人的な願いや思いをいう「祈り」については、「わたくしの祈り」「みづからの祈り」等の形で現れる。

6 用例中の「かかる形見さへなかりしかば」には、「結びおきし形見の子だになかりせば何にしのぶの草を摘まし」(『後撰和歌集』雑二 兼忠母の乳母)が引き歌として込められている。

7 藤壺も三十七歳で死去したことを受けている。ただし、実際には紫上(こころ)では三十九歳。

8 「病がやむ薬がない」という表現には、「われこそや見ぬ人こふる病すれあふひならではやむ薬なし」(『拾遺和歌集』恋一 読み人知らず)が想起されていると考えられる(新古典文学大系脚注)。